

ギメ博物館所蔵の敦煌出土ウイグル語活字について

ヤ スイン ア シュ リ
雅 森 吾 守 爾
(櫻井智美 訳)

[訳者記] 本稿は1998年11月7日京都大学文学部羽田記念館における講演(中国語、原題は「巴黎 Musée Guimet 所蔵敦煌出土回鶻文活字初步研究」)の内容を日本語に訳したものである。

はじめに

古代の敦煌地区は中西交通の出入口として東西各種文化が交わる地域であり、また西域を経て中国内地に伝わってくる各種の宗教が必ず通る地でもあった。そのため、これらの文化と宗教は、すべてこの地にその痕跡を残している。西漢時代、仏教はすでに敦煌地区に入っており、西域の多くの高僧は内地へ伝教に行く前に必ずこの地に滞留し、当地の仏教界と共同で經典の解釈を行って仏教の教義を広めていた。長期にわたる開拓・管理を通して、敦煌地域内の鳴沙山東麓には、南北1.5 km余、高さ10～40 mの断崖上に大規模な洞窟群が開削された(現在は492の洞窟がある)。それらのうち、最も時期が早いものは西暦366年に作られており、最も遅いものは14世紀に造営されたものである。千年近くの高い造営を経て、敦煌は現存する中では、内容が最も豊富で歴史的に最も古い、世界的に最大規模の仏教芸術として、文化・歴史遺産の宝庫となったのである[馬1996: 1-13]。

敦煌の歴史を振り返ると、ウイグル人はかつて何世紀にも及ぶ活動を行い、地方政権を樹立したこともあった。11世紀初、ウイグルは敦煌地区最大の政治勢力となり、当地の曹氏帰義軍までもウイグルの抑えるところとなった。河西ウイグルは、政治上で高昌ウイグル・カン国との関係が密であり[栄1996]、河西回廊や敦煌のウイグル人もまた仏教を信仰していた。ウイグル集団がこの辺りを統治して以後、ウイグル王室や貴族ひいては一般の人々まで篤く仏教を信仰したため、敦煌の仏教事業は継続して発展した。ウイグル貴族は莫高窟の開削や各種仏事を強力に支持し、その結果、多くの仏典がウイグル語に翻訳されたほか、多くの洞窟の新開削・重修や壁画の修復がおこなわれた。敦煌蔵經室から発見された大量の仏典や、莫高窟中のウイグル語題記や、ウイグル王室と関連のある壁画など、これらすべてはウイグル人が仏教を信仰していた証拠である。

敦煌の石窟寺院には一部分ウイグル人の洞窟だとわかるものがある。例えば、莫高窟中の

供養するウイグル人を描いた画像や題記は、ウイグル人の洞窟であると判断・区分する最も直接的で、説得力のある理由である。また、ウイグル芸術の特徴や風格がよく表れた壁画も、ウイグル人の洞窟の重要な特徴である。洞窟の形状や壁画に反映された、ウイグル仏教芸術に独特の鮮明な民族的特徴や時代的要素も、判断や区分の重要なよりどころとなる。これらいくつかの観点により、莫高窟・西千仏洞・榆林窟などにおいてウイグルの洞窟を選り分けることができる。例えば、莫高窟においては、第 306～310, 363, 399, 418, 244 (甬道), 409, 237 (甬道, 前室), 148 (甬道及び内室局部), 97, 330, 245, 207, 464 窟等の洞窟がウイグルのものである。また、西千仏洞では第 4, 9, 10 (甬道), 12, 13 窟の 5 窟が、榆林窟では第 21 (前室甬道), 39 窟がそうである。敦煌のウイグル洞窟中に多く見られる供養する人物の画像は、とりわけ重要な特徴の一つである。その中には、ウイグル・カガンや首領の画像やカガンの妃の画像がある。例えば、第 100 窟の東の壁には、「□天公主は甘州ウイグル・カガンである……」や「女の甘州ウイグル・カガン天公主が心から供養する」などの題記があり、そこから、ウイグル貴族や上層階級の仏教に対する重視が見て取れるのである。

ウイグルと境をなす西夏も、11 世紀に仏教事業を強力にすすめ大規模な仏寺を建てて仏教経典を翻訳した。ウイグル僧は西夏王室の招請を受けて仏教の普及や寺廟の建設に参画した。そのため、彼らは西夏においても大変高い地位にあった。例えば、天祐垂聖元年(1050)冬、西夏は承天寺の建設を開始したが、建設後「ウイグル僧を招いて座に登らせ経を講じさせた。没蔵氏と諒柞もこれに御臨席になられた」。この「没蔵氏」は西夏の最高統治者没蔵太后を指し、「諒柞」は幼主を指す。ここで挙げられたウイグル僧は、新しく建設された寺廟の中で「台に登ってお経を講じ」、皇太后と幼主がそれを聞いたのである。これは、ウイグル僧に対する寵愛が飛び抜けていたことを表している。また、『西夏記』巻 11 の記載によれば、西夏の仏寺は「広くウイグル僧を招いてそこに居らしめ、経文を説き訳して西夏文とさせた。」西夏は毅宗諒柞の時代、遼朝と仏教の交流を行い、遼朝に対してウイグル僧や金仏・『梵覚経』等を進貢した。ウイグル僧は西夏において翻訳や経典を講ずるような活動を行っただけでなく、両国間の仏事の往来の際の「贈り物」とされて遼朝に赴いてもいたのである [史 1993:28-29]。

さて、今世紀のはじめ、イギリス・フランス・ロシア等の調査隊は敦煌・トルファンなどから何万にもものぼる各種の経典を発掘した。これらの文献のうちの相当数はウイグル語で書かれており、その中には抄本もあり印刷したものもあった。それと共に、敦煌石窟中においてウイグル文字ウイグル語の木活字が発見されたのである。これらの木活字は現存する最も古い木活字の実物であり、中国のみでなく世界の印刷技術の創造と発展の研究にとって非常に貴重な資料と言える。一方、活版印刷発明の基礎は木版印刷術で、活版印刷が発明される以前において、ウイグル人は木版印刷術を利用して多くの仏典を刷っていた。活版印刷術の使用と発展のためにしっかりとした文化的、技術的背景を構築したのは、この木版印刷術だったのである。

I ウイグル人の中での木版印刷術の伝播

隋末唐初において中国は初めて木版による印刷術を作り出したとされている。木版印刷は、人類の歴史上最も古い、大量にかつすばやく文字や図像を複製する技術であった。木版印刷の行程を簡単に述べれば以下のごとくである。まず、字や絵が達者な者が下書き・下絵を書く。その後、書き上がった原稿を裏返して版木として用いる木板の表面に貼り付ける。圧力をかけて文字や図像を木版上に反転して写し終わると、刻工が凸版に彫る。校正して誤りがなければ、印版を台の上に固定する。印刷用の墨を印版上に均等に塗ってゆき、最後に紙を貼り付け清潔なブラシで軽くこすると、印版上の文字や図像は紙の上に印刷される訳である [羅 1993:59]。版木として用いられる木材は、木目が精密で質が均一なこと、彫刻が容易なこと、資源がある程度豊富なことなどが必須である。文献によれば、版木を彫る木材には、梨の木・棗の木・ヒメツゲの近縁種（黄楊木）・キササゲ（梓の木）等があり、中国北方では梨や棗の木などが多く用いられ、南方では黄楊木や梓の木が選ばれることが多い。各種木材は彫刻の前に処理をして、彫りやすく、年月を経ても湾曲・変形しにくくする必要がある。版木を彫るのに用いる道具には、主要な物として彫刻刀・のみなどがある。このほか、鋸・かんな・物差し・直角定規・糸・木槌などが補助的に用いられる。印刷に用いるものには、机・印版を挟んで固定する器具・紙を挟んで固定する道具・大小のはげがある [Tsien 1985:196-201; 銭 1990:174-178]。木版印刷術は三百年以上の発展を経て宋代には広く普及し大変盛んになった。宋朝政府は歴代典籍の収集整理や刊刻出版を重く見て、建隆元年(960)には集賢院・史館・昭文館などの機関を設立し、歴代典籍の整理出版の責任を負わせた。

中原での木版印刷術は西北ウイグル地区や西夏に伝えられた。その後のウイグル地区の木版印刷事業の発展は、仏教のウイグル人の中における影響と密接に関わっていた。仏教を信仰するウイグル人は仏典の翻訳、そしてその刊刻・流伝を非常に重視しており、高僧たちは積極的にそれらの事業に参加して仏教を広めた。一般の人々は仏様のご加護があるようにと、自らの手で、あるいはお金を出して人を雇い、仏典を抄写した。ウイグルの統治者や貴族階級の者達も、仏の加護・順調な天候・国や民の安泰を祈って、発願喜捨したり、文章家に仏典の書写を頼んだり、人を雇って版木を彫り印刷させたりした。今世紀初、トルファンのウイグル仏教遺跡から大量のウイグル語の印刷仏典の残巻が出土したが、このような当時の状況を説明するものだといえる。

トルファン出土の、あるウイグル語木版印刷仏典の跋文には以下のようにある。

- 11 y(ä)mä kim inčip ol
- 12 alqu yirtinčü-nüng adī manggal-ī:
- 13 anaz umuγ-suz-lar-nıng yolčī-sī yirči-si::

- 14 adī kötrülmiş burhan bahšimīz-nīng:::
 15 altun aʒizīn nomlayu y(a)rliqamīš:::·
 16 alqu ada-lar-ta umuʒ boltači:::
 17 arviš-lar iligi sitadaptri sudur-uʒ:::
 18 ayančang kirtgünč kōngül-in m(ä)n kamala ačari:::·
 19 ayayu yuʒ säkiz kuḡun yaqturup üläyü tägindüm:::
 20 ariš ariʒ bo nom-uʒ yaqdurmiş buyan küčintä:::
 21 alqu qamaʒ t(ä)ngri-lär-nīng asilzun t(ä)ngritäm küč-läri:::

訳文：しかる後、再び、この世におけるあらゆる不幸で絶望した衆生の指導者であり先導者である大智大能の仏の語る有り難いお言葉を以て、あらゆる厄運から逃れて幸せをつかまんとする、名づけて“arviš-lar iligi sitadaptri sudur”という経文は、我が敬虔なるカマラ法師により、発願と功德を力を以て、また拝礼の心を以て、108巻を彫り上げ上梓された。謹んでこの経を刊刻する功德の力を以て、あらゆる天（テングリ）の神聖な力が増長せんことを願う。[Zieme 1975: 187-211]

跋文の内容からわかるのは、この経を印したのが「カマラ法師」であって、全部で108巻を刻版印刷したことである。注意すべきは、跋文中にでてくる印刷に関するウイグル語動詞‘yaqturup’である。その語幹‘yaq-（印刷するの意）’は、ウイグル人が既に専門用語をもって「印する」という概念を表すようになっていたことを説明している。また、別のウイグル文献の跋文残巻には以下のようにある。

- 2 [yaq-]turmiş buyan küčintä: alqu-nung a/...
 3 qaʒan han-īmiz-nīng: ančulayu oq
 (四十五)
 4 qatun-nung altun uluʒ-lari-nīng:·
 5 ada-lari tuda-lari ʔmrilip uşun yaşap: ʔlp bulʒu-luq
 6 burhan ʒutin bulmaq-lari bolzun (以下略)

訳文：この経を刊刻する功德の力を以て、我がカガン（国王）とカトゥン（王后）、そして彼ら黄金家族が一切の險悪を排除し一切の厄運をほどこき長寿ならんことを祈る。仏の幸いを得て勇猛なる身を成就せん。

この段の願文の内容からみて、この経を刊刻する目的はカガンと皇后のために福を祈り、一切の厄運を排除して健康・長寿となり仏の福を得ることであった。この跋文中の“yaqturmiş buyan küčintä（刊刻の功德）”中の‘yaq-’は動詞語幹で、語義は「印する」である[Zieme 1975: 198]。また、現在日本にある木版印刷物の残頁の跋文にも、‘qamčuta yaqduruldi（甘州において印刷する）’とあり、やはり‘yaq-’という語幹は「印刷する」という確固とした意味を持つ。このことから、「印刷する」という概念がウイグル人の間ですでに一定の文化的・技術的背景を持っており、木版印刷術は彼らの間で相当普及して

いたことがわかる。ベルリンにある別の印本ウイグル文献の跋中にも、発願刊刻者はこう書いている。“*ayaγuluq bahšim bahši ayaγ-qa tāgimlik qutinga türkčä aqđartıp t(a)wɣač-ča-sin türkčä-sin tamɣa-ta oyđurup ming wuu yaqđurup bišrundači-larđa üläyü tāgintim*（我が尊敬する法師バクシのために、訳して突厥語 [ここではウイグル語を指す] となし、漢文と突厥文とで刻して一千巻を印し、[先達の] 大徳のことに続かん。[Warnke 1981: 215–220]）”この跋文に出てくる ‘*tamɣa-ta oyđurup*（印の上に刻す）’ 中の ‘*tamɣa*’ という一語は、ウイグル語の中では「印章」の意味であるが、ここでは「印板」という意として用いられている。ここでなぜ *tamɣa* という語を使ったのかという意味については、さらに検討したい。

また、現在、京都の藤井有鄰館に1件の仏典の残巻が収蔵されており、ウイグル人の印刷事業について記載されている。これは4行のウイグル文字ウイグル語で、内容は以下のとおりである。

- 1 -sīzqa tükäl-lig bolzun-lar ::
- 2 či čing bir otuzunč ud yil üçünč
- 3 ay bir yangī-qa qamčū-ta yaqđurultı ::
- 4 sadu [s]adu ::

訳文：願わくは円満を成就せん。至正21年、牛の年、3月1日。甘州において制作せり。善きかな、善きかな。[Zieme・百済 1985: 31–32]

文中の ‘*qamčū*（甘州）’ は当時河西の重鎮であり、そこにはウイグル人が住んでいた。この跋文の内容は、甘州が河西回廊の文化的中心であり、そこでは仏典の印刷がすすめられたことを明示しており、非常に重要な資料である。

今世紀初め、ドイツ・フランス・イギリス・ロシア・日本の調査隊が新疆トルファンや敦煌石窟寺院において獲得した古文献中には、何千ものウイグル語の印刷物残巻が含まれていた。トルファンにおいては発掘の度ごとに大量の印刷物が発見された。これらの印刷物は以下の数類に分類できよう。

第一、挿し絵があるウイグル語経典。その中には、挿し絵と文字が同一頁上にあり、上が挿し絵で下が文のものや左が絵で右が文のものがあり、前者は一般的には図と文がちょうど半分を占めている。例えば、ドイツに現存するウイグル文献中、ある上図下文の文献は横幅が比較的広く、図中では十数人の人物が静かに座って読経したり馬に騎乗して象と戯れたりしている。彼らの表情は生き生きしており、とても活動的である。これとは別に、挿し絵が経文中に挟み込まれているものもあり、こちらは幅が狭い。挿し絵の内容は非常に多彩で、その描写は真に迫りまるで生きているかのようである。その精密な彫刻には刻工の技術の高さが現れている。その他、経典の扉絵もあり経折装（折り本）の仏典の巻初の絵となっている。例えば、トルファンで発見されたウイグル語『仏説大白傘蓋総持陀羅尼經』は折り本であり、巻首に2枚の仏画がある。また、1枚の挿し絵と多種の文字が同じ版木に刻された印

本仏典『聖救度仏母二十一種礼賛経』（現在北京にある）は折子式（折り本）で、上下に枠線があり2本の横線で3部分に分けられる。図は上部で三分の一を占め、文が中・下部の三分の二である。中段部分には、サンスクリットとチベット語が、下段にはウイグル語が書かれている。

第二、挿し絵のないウイグル語仏典。第一、二類の印刷物は多く経折装の仏典である。

第三、多羅樹の形を象った印本仏典。これらウイグル印本文献には、仏教上で重要な経典が含まれている。例えば、『金剛経』、『入菩提行疏』、『仏頂心大陀羅尼経』、『八陽神咒経』、『八十華嚴経』、『聖救度仏母二十一種礼賛経』、『観無量寿経』、『仏説大白傘蓋持陀羅尼経』、『仏頂尊勝陀羅尼経』や密教の文献がある。ベルリンに現存するウイグル文献中では、木版印刷の『金光明最勝王経』の残片が数葉あることがわかっている。これら以外にも、仏画のみで字がないものもある [Zieme 1995/96: 409-424; 艾伯特 1990: 263-276; Sander 1994: 105-121; Zieme 1996: 64-65, Tafeln 82-85]。

トルファンの古代遺跡では、印刷物以外に花紋や図版を印刷するのに用いられた木版や印刷工具も発見されている。勝金口石窟寺院遺跡では、ドイツの調査隊がかつて印刷用の木版を発見した。それは長さ103 mm、幅175 mmで正方形を呈しており、多くの平行線が彫られ、左右枠線の真ん中に直線が一本引かれていた。また、交河故城から出た版木は長方形で長さ56 mm、幅28 mm、面上には精密な螺旋状の図案が浮き彫りにされている。背面には凸型の柄があり、そこには吊り下げるための穴があいている。高昌故城で発見された別の印刷用版木は濃いとび色をしており、おそらく桑の木か梨の木から作ったと思われる。その長さは134 mm、幅95 mmで上面に花紋の図案が彫られており、その彫りは非常に精巧で、浮き彫りを呈している。このような精細な美しい花の図案の版木は、トルファンで十数件見つかっており、現在はベルリンのインド芸術博物館に保存されている。これら精緻な浮き彫りを彫った印版は、トルファンにおいてかつて木版印刷術が広範に利用されていたことを別の側面から説明するものである。複雑精巧な花の図案の彫刻は、トルファンにおけるウイグル人の印刷技術が相当の水準に達していたことを信じさせるに足るものだといえる [Bhattacharya 1977: 112-114]。

II ウイグル語活字の発見とその収蔵状況

1908年2月25日、フランス東洋学者ポール・ペリオ (Paul Pelliot) はフランスの中央アジア調査隊を率いて敦煌に到達した。同行者には、測量技師ルイ・ヴェラン (Louis Vailant) と撮影技師シャルル・ヌヴェット (Charles Nouvette) がおり、敦煌千仏洞を対象として全面的な測量と調査を行った。莫高窟のすべての洞窟について通し番号をふり、大量の壁画や塑像の写真を撮影し、また、洞窟中の漢語・ウイグル語・チベット語その他の文字の題記を抄録した。さらに、蔵経室の王道士の信任を得て蔵経洞に入り、遺されたあらゆる

る文献や絵画に目を通した。ペリオは大蔵經に収められない文献、及び年代が明確に記された文書や絵画などを重点的に選択し、これらの文献や芸術精品を廉価で購入し運び去った。ペリオはまた莫高窟北区の第181・182窟（現行の通し番号で464・465窟）の砂の中から、多くのウイグル語・西夏文・チベット語文献に加え、長く学术界が関心を寄せていたウイグル文字ウイグル語の活字を発見した。ペリオ調査隊の収集したもののうち、文献史料は一部分がフランスのギメ・アジア芸術博物館（Musée Guimet、以下ギメ博物館と簡稱）に収蔵されている以外、大部分はフランス国立図書館（Bibliothèque nationale）に保存されている。美術品はパリのルーブル（Louvre）に入り、後にギメ博物館に移管された。上記のウイグル語活字もギメ博物館に収蔵された。ギメ博物館が収蔵するこれらのウイグル語活字は合計960個あり、同館図書館長のフランシス・マクイン（Francis Macouin）氏によって紹介された。紹介当時、これらの活字は泥にまみれ博物館の貯蔵室の中にずっと放置されていた。後に彼は泥を除去し、活字のサイズに合わせて箱を作り重要文物として保存した。現在、これらの活字は精巧な木箱の中に三層の引き出し中に並べられている。館蔵の番号はMG 25507である（MGはMusée Guimetの頭文字）。木箱の中には当時ペリオが試しに印字してみたノートサイズの紙が1枚入っており、十数個の活字の印影があった。活字発見の経緯はペリオが以下のように記載している。

1908年5月23日、土曜日、181窟において印刷に用いられた多くの方形の蒙古語（活字）を見つけた。また、同時に西夏文字の印刷物の残巻も発見した [Pelliot 1908: 353 (7)]。

ペリオが敦煌で発掘を行っていた当時、忙しさの中でこれらの活字がウイグル語であることを認識できず、このような現場記録が残されたのである。それ以後、ペリオがこの活字を整理・研究することはなかった。1925年、合衆国の印刷史の専門家であるカーター（Carter）は、有名なその著書 *The Invention of Printing in China and its Spread Westward* においてまず4個の活字の印影を載せ、これらがウイグル語活字であると断定した。これらの印影はその後多くの著作に引用された。しかし、カーターはウイグル語関連の知識を持ち合わせておらず、また当時のヨーロッパ学术界におけるウイグル語方面の研究がまだ発展途上であって、敦煌の古代史や出土文献に対する研究もまだ初歩的段階にあったため、カーターはその豊富な知識と鋭敏な学術的嗅覚を以てこれらの活字が世界印刷史上に占める地位やその学術的価値を鋭く指摘しながら、その数個の活字だけをもとに、それらの活字がすべて単語を単位とするものであり、王楨が発明した活字と同じであると即断してしまった。つまり、これらの活字の性質については誤った結論を導いてしまったのであったのである。彼はその著作の中でまた以下のように述べている。

彼ら（ウイグル人を指す一著者注）は事実上字母の活字を持ったことがあったのかも知れないが、その事実を記載するものはないし、これまで物証としての字母活字というものも発見されていない。敦煌発見の活字（ウイグル語活字を指す一著者注）は依然

として中国の方法を真似ており、字母ではなく、ひとつひとつが綴りあがった単語の活字なのである [Carter 1925: 167-168; Goodrich 1955: 218-219; カート 1957: 188]。

カーターはこの分野において権威的存在であったため、以後数十年間彼の議論は引用され、ウイグル語活字は単語を単位とすものであって、字母或いは音節を単位とするものは存在せず、その性質は中原地区で創られた、字（単語）を単位とする活字と同じだという誤解が植えつけられた。カーターがその著作を世に問うてから数十年後にも、学术界に影響を持つ著作中でカーターの見方を踏襲する者もあり [張 1989: 676]、また一旦はこのウイグル語活字がすでに紛失したとまで伝えられた。例えば、イギリスの著名な科学史家ジョセフ・ニーダム (Joseph Needham) の書には、

ウイグル語活字はペリオが 1907 年に発見したもので、最近の情報によれば、これらの活字はすでに紛失したという。

と注されている [Tsien 1985: 304; 銭 1990: 278]。

これらの活字が発見されてから 80 年近くもの間、この活字の意義についてずっと曖昧模糊としたままだった。もちろん、研究者の中には、関係論文でこれらウイグル語活字の発掘や保存状況、概観について多少は言及する者があった [Gabain 1967: 27-28; Macouin 1984: 147-157; 森安 1985: 95-96]。しかし、詳細に立ち入ったものはなく、系統的かつ全面的な研究についてはいうまでもなかった。筆者はユネスコ平山郁夫シルクロード研究奨学金を得て、1995 年イギリスにおいて敦煌文献の研究を行った。その際にパリへ赴き、この敦煌ウイグル活字の消息を尋ねたあげく、遂にギメ博物館の収蔵庫で、800 年の歴史を経たウイグル語木活字を見つけた。そして、これら数百年もの長い年月を経て、今世紀はじめに中国国外に流出した 960 個の全ての活字を、5 枚の中国産の画仙紙上に印字し、その活字が表すところの文字や符号をはっきりと再現し解説を加えた。その結果、これらの活字は漢字活字や西夏文字活字とは違うことがわかった。これら 2 種の活字は、ともに 1 字（つまり単語）を単位とするものであるが、ウイグル語活字の中には、単語を単位とするもの、音節を単位とするもの、音素を単位とするものがあり、音素を単位とする活字と漢字活字の間を媒介する仲介的な類型に属する活字といえるものであった。これは重要な学術的価値をもつ事実である。つまり、敦煌ウイグル語活字は、活版印刷史の研究にとって重要な意義を持つだけでなく、活版印刷技術やその考え方が中国から西洋へ伝わっていく過程と方式に対しても計り知れない価値を持っているのである。

Ⅲ 敦煌出土ウイグル語活字の形状・材料及びその製作方法

これらの活字はみな凸版陽刻の反転文字であり、そのほとんどが幅 13 mm、高さ 22 mm で、長さは表示する符号の大小によって決まっている。堅い材質の木でできており、仔細に観察すると淡い赤褐色と黄褐色のものがあり、棗か梨の木のようなものである。棗や梨は中国北方

地区に多く見られる種類で、西北地区にも開く分布する。木質は細かく彫刻しやすい特徴があり、また材料も豊富で価格も安い。普通、活字に用いる木は、使う前に処理を施して長時間の使用に耐えられ、虫食いにあわないようにする必要がある。それらの活字のほとんどはすでに何度も使用されたようで、外側が黒くなってはいたが、文字面は数百年を経てもなおはっきりとしていた。比較検討の結果、これらの活字の製作方法は2種類あることがわかった。一つは通常の方法で、つまり、先に字様を書いて準備した板木の上に貼り付け、字の形が写ったら刻工が活字を刻する。その後活字を切り分けて修正を加え使用に供する。もう一つの方法は使用済みの木版を使う。つまり、必要に応じて古い版木の文字を単語や音節ごとに裁断する方法である。敦煌のウイグル語活字中にあった活字のうち余分なものは、おそらく古い木版をばらしたものだだろう。また活字の文字面と土台の部分の両方にウイグル語と標点記号が彫ってあるものがあり、これは急を要したか、あるいは原料の節約のためだったと考えられる。このほか、一面に彫り損ねた字がみえるものがあり、原料節約のためか、別の面にウイグル語を彫ってあった。

IV 敦煌出土ウイグル語活字の分類と分析

ギメ博物館に現存する960個のウイグル語活字は、おそらく当初使用していた活字のごく一部分であろう。数百年間放置された後に発見され、つまりその間六百年もの時間が経過したのであり、大部分はすでに散佚したり壊れたりしたに違いない。幸運にも、敦煌は中国西北に位置し乾燥した気候であるため、数百の活字が腐敗することなく現存しているのである。あるいは、活字を作った人々が活字の材料に施した化学的処理と関係があるのかもしれない。それらのうちほんの何枚かを除いて、活字の文字面の一画一画や線は傷んだ形跡がなかった。フランス産の公文印章用のインクを用いて中国産の画仙紙の上に印刷したところ、結果は頗る良くにじみもなかった。印影もはっきりしており、現存するウイグル語印刷物（実物）の文字と比べてもほとんど違いがなく、ウイグル語活字の印文の内容を研究する上で非常に益するところがあった。

敦煌出土のウイグル語活字の印字について解読を行い分類したところ、活字が表す文字や符号は大きく7類に分類された。









(1) 字母を単位とする活字

これは、ウイグル語のあらゆる音素を表すのに用いられる。ウイグル語には、i/i/a/ä/o/ö/u/üの8つの母音音素がある。そのうち、i/ä/ö/üは前舌音、i/a/o/uは後舌音である。ウイグル語の母音oとuそしてöとüは文字の上では区別がない。字母ö・üは字母o・uの後ろに字母yを加えて表示する。字母ö・üが第一音節中の半母音yや子音k・gの後ろにくる場合には、u(o)と書きyを略する。逆に、語頭あるいは第一音節中の子音の後（半母音の字母yと子音のk・gは除く）にくる場合には、字母yを省略できない。ウイグル語

には、b/p/m/n/d/t/z/l/s/š/č/r/g/k/ɣ/q の16の子音音素と、半母音 y・w の2つがある。現存の活字中一部分は、音素を表す活字で語頭・語中・語末の3種の形式すべてを持つものがある。

字母を単位とする活字とそれが表す音価は以下のようなものである。まず、母音音素とそれに対応する活字と活字番号を示す。

表1

音素	活字印影*1	活字番号*2	音素	活字印影	活字番号
i		817, 217	i		818
a		215, 216	ä		174, 173, 175
o		734, 735, 736	ö		65, 734 + 819
u		734, 735, 736	ü		65, 734 + 819











*1 印刷の関係により、活字印影は同縮尺で縮小した。以下の表も同じ。

*2 表中の活字番号は、拙著『敦煌出土回鶻文活字研究』の‘活字印文番号’を基準とする。以下の表も同じ。

字母 b と p は形態は同じである。字母 s と š も同じであるが、ただし š を表す字母には別に変種もあり、それは s の右側に二点を付ける。q と ɣ も形は同じで、q には別に変種があり、左側に二点を加える。語中と語尾の i と ī 音は文字に区別がない。子音音素と対応する活字については以下のようなものである。

表2





音素	活字印影	活字番号	音素	活字印影	活字番号
b		682, 683	p		682, 683
m		724, 725	n		946
d		652, 653, 651	t		749, 754, 756
z		739	l		623, 624, 625

s		848, 761, 763	s		848, 761, 777
č		669, 670	r		845
g		215	k		214
γ		849, 844	q		847, 852
y		821	w		810, 733

(2) 単語を単位とする活字

単語を単位とする活字の中には、名詞・形容詞・数詞・代名詞・副詞・後置詞や小詞等があり、名詞中の一部分は仏教術語であった。また動詞の文法形式（副動詞・形動詞等）を表す活字もあった。意味がはっきりするものを便宜的に取り上げ、一例を示そう。

表 3


活字印影	ラテン字母転写	日本語訳	活字番号
	ät'öz	身体, 体, 身	207
	ariči	養蜂の人	187
	il	国, 人民	153
	kōngül	心, 感覚, 意志, 情	151

(3) 動詞語幹を単位とする活字

動詞は人や物の行為・状態・変化・心理的活動の過程や動作の状況を表す品詞である。ウイグル語の動詞は、法、態、時制、人称、肯定か否定かなどの文法の範疇がある。その形態変化は動詞語幹の後ろに各種接尾辞をつけることで表現する。ウイグル語の動詞語幹は、後

ろに接辞を加えて新しい単語を作ることができるし、また語意を変化させたり拡大したり、あるいは品詞を変えたりもできる。ほとんどの場合、語幹は接辞を伴って初めて文法的に意味を持ち、単語と単語との間、あるいは単語と連語との間の関係を表して、完全な意味を表現することができるようになる。ただ、時には動詞語幹のみで完全な意味を表すこともある。以下に例を挙げる。



表 4


活字印影	ラテン字母転写	日本語訳	活字番号
	nomla-	説法する	103

(4) 接尾辞を表す活字

ウイグル語の形態変化は単語や語幹の後ろに接尾辞をつけて完成する。ウイグル語の接尾辞は2種類に分けることができる。第一類の接尾辞は、単語の「語彙—文法」範疇の意味を表し、単語の語彙の意味を説明すると同時に、語彙のある一類の単語の「語彙—文法」範疇におさめる。第二類の接尾辞は、ただ文法的な働きしかもたないものである。それらは結合すべきある単語・連語や句の構造中の、文法的機能を決定するものであり、語彙の意味に変化は生じない。ウイグル語の単語の語義変化や文法形態の変化は、全てこの2種の接尾辞を語幹の後ろに付けて表現する。違う種類の各種接尾辞の多くが、一つの語幹のあとに同時に加えられる。語幹の後ろにつく接尾辞が多くなるにつれ、表す意味も複雑かつ精確になる。ウイグル語には母音調和や子音同化があるために、ウイグル語の接尾辞の大多数は多くの変種がある。違う種類の接尾辞が同時にある語幹の後ろにつくときの順序は、造語の接尾辞が語幹に最も近く、そのあと否定の接尾辞・動名詞や形動詞や副動詞などの接尾辞、そして数や人称所有の接尾辞・述語の人称接尾辞・格を附加する接尾辞と続く。例えば, adaqIarinta という一単語は, adaq-lar-i-n-ta の五つの部分に分解することができる。adaq は名詞語幹で「足(復)」の意味である。-lar は複数の接尾辞, -i は三人称単数に属するという接尾辞, -n- は介在音, -ta は位格の接尾辞であり, 合わせると「その足(復)の上に」の意味になる。

表 5

活字印影	ラテン字母転写	日本語訳	活字番号
	-lar-	名詞複数の接尾辞	500, 499
	-in	具格の接尾辞	510, 463, 465

	-qa/-ya	与格の接尾辞	508, 507, 506
---	---------	--------	---------------

(5) 意味のない或いは文法上機能をなさない音結合を単位とする活字




表6

活字印影	ラテン字母転写	番号	活字印影	ラテン字母転写	番号
	-dl-	649		-dr-	646

(6) 紙面の枠線を表す活字

この中には、単欄と双欄がある。



表7



活字印影	説明	活字番号
	双欄	919
	双欄	918
	単欄	892

(7) 標点記号を表す活字

一点、二点及び四点を、また、付加記号を表す活字もある。

表8

活字印影	説明	活字番号
	一点	949
	二点	360

	四点	428
	二平行斜行単線	350

その他、活字を並べるときに隙間を埋めるくさびのようなものや中心木がある。

V 世界印刷史における敦煌ウイグル語活字の意義とその年代

敦煌のウイグル語木活字の発見は、中国そして世界の印刷史上に重要な意義を持つ [雅森 1998；史・雅森 1997]。

(1) 敦煌ウイグル語木活字は現存する世界最古の木活字の現物である。ウイグル語活字が発見され十分に研究されるようになるまで、中国古代印刷の発明と使用に関しては、ただ宋代の畢昇が発明した泥活字についての文字記録が残るのみで、活字の実物を欠いていた。そのため、多くの研究者は中国の活版印刷の創造性に疑問を持っていた。しかし、ウイグル語活字の発見と研究によって、中原内地で活字技術が発明されてまもなく、すでにウイグル地区に伝わり、応用されていたことがわかった。中国が活版印刷術を発明したことについて、再び歴史文物の実証と確認を得られたのである。

(2) ウイグル人は活版印刷技術の応用範囲を地域的には西域まで拡大させた。大量の考古発掘の結果、敦煌で発見された木活字の実物以外にも、トルファン高昌ウイグルの遺跡や勝金口遺跡・ベゼクリク石窟群などにおいて大量のウイグル語印刷物や印刷に用いられた印板が発見された。このことは、印刷がすでにウイグル人居住区で広範に用いられており、印刷技術の西伝に一定の地域的・文化的背景を築いたことを証明しているのである。

(3) 中原で発明された漢字の活版印刷術は、まもなく漢地文化と異なる民族文化地区に伝わった。ウイグル人はウイグル語の特徴にもとづいて、漢字活字とは異なる新しい種類の活字を生み出した。ウイグル語活字はまずウイグル語の形態変化を意識し、ウイグル文字が表音文字であるという重要な要素をも考慮に入れており、その中にはすでに西方の字母活字形成の基本原則を含蓄していたといえる。中原の漢字活字は、四角い漢字一字を単位としており、その最も早い記録は11世紀のものである。一方、ドイツのグーテンベルグ (Johann Gutenberg, 1397 - 1468) が用いた字母を単位とする金属活字は15世紀の物であった。両者の間には数百年の時間的隔たりがあり、地理的にも非常に遠い。敦煌ウイグル語木活字実物の発見は、時間的にいうと、中国の活字が西伝する過程で経過した2世紀間の過渡期に係る。活版印刷技術の伝播という地域的側面についても、12世紀から13世紀にかけて、つとに中国の活版印刷術の発想と技術が西域に伝わっていたと、いま確信することができる。

(4) ウイグル語活字の創製や応用に関わる資料的な記載は目下存在しないので、その年代は間接的な史料や歴史的背景によって、大まかに推測せざるを得ない。敦煌地区のウイグル人の活動についての史料に拠り、また莫高窟興亡の歴史などの要素を考慮に入れば、敦煌のウイグル語木活字の年代は、12世紀末から13世紀前半に違いない。この年代はちょうど西夏地区の活版印刷術が発展した時代にあたる。この時代、西夏の仏教とウイグルの間には密接な関係があり、両地域の経済・文化交流も必然的なことであり、ウイグル活字の創造と使用もこの時期を下ることはあり得ない。13世紀末は、敦煌地区のウイグル勢力はすでに衰え、社会は動揺し戦乱が続いた。その政治や経済や文化の状況から言っても、仏教経典を印刷する良い環境にはなかったのである。

(5) 活版印刷術が中国で発明された後、ウイグル及び西夏地区に伝わり、活字の種類も変化・発展を遂げた。その中で、以下に述べるような類型もまた、それぞれの民族の言語や文字の違いによって変化が生じた。最初は、四角い漢字を単位とするものであり、西夏人が使用する活字も西夏文字の字（＝単語）を単位とする活字であった。それに対して、ウイグル人が用いた活字は、音素・音節と単語をそれぞれ単位とする混合型の活字であって（つまり中間的な活字）、この時すでに現代の音素による活字設計の思想と原理を持っていたのである。13世紀はじめ、ウイグル地区はモンゴル帝国に帰属し、多くのウイグル知識人がチングスカンの幕僚となり、重任を言いつけられる者もいた。ウイグルの有能な刻工や技術者、そして一般の人々も数多く軍隊に入って西征した。彼らは印刷技術を含めたウイグル文化を西に伝えた重要な媒介であった。ウイグル文化はかつて中央アジアテュルク語民族の文化に対して重要な影響を与えた。その範囲は、文語・芸術などの方面も含んでおり、その影響は長期にわたった。[Esin 1981: 90-105] その時期は中国と西方の間で文化の直接交流が最も盛んな時期でもあった。活版印刷術は、ちょうどこの時期にウイグル地区を通過して西方に伝わったと言えよう。これはちょうどニーダムの著書中に以下のように書かれるごときである。「もし印刷術が東方から西方に伝わる過程で、そのような関連があったならば、すでに木版印刷に習熟しており、さらに活版印刷にも詳しいウイグル人こそが、この伝播の過程で重要な作用を果たすのによい状況にあっただろう。」[Tsién 1985: 306; 錢 1990: 272]

[附 記] この論考は、UNESCO 平山郁夫シルクロード研究奨学金、及び日本国際交流基金フェロシップ事業による研究成果の一部である。また、紙上をお借りして、京都大学文学研究科・文学部の方々に感謝の意を表したい。

文 献 表

艾伯特 (Ebert, J.) (1990) 柏孜柯里克的千手観音絹画 段文傑 (主編) 『敦煌石窟研究国際討論会文集 (石窟芸術編)』遼寧美術出版社。

Bhattacharya, C. (1977) *Art of Central Asia*. Agam Prakashan. Delhi.

- Carter, T. F. (1925) *The Invention of Printing in China and its Spread Westward*. Columbia University Press.
- Esin, E. (1981) Muhammad Siyah Qalam and the Inner Asian Turkish Tradition. In: *Islamic Art*. New York.
- Gabain, A. von (1967) *Die Drucke der Turfan-Sammlung*. Akademie-Verlag, Berlin.
- Goodrich, L. C. (1955) *The Invention of Printing in China and its Spread Westward* (2nd ed). the Ronald Press Company, New York.
- 卡特 (著), 吳澤炎 (中訳) (1957) 『中国印刷術の発明和它的西伝』商務印書館。
- 羅樹宝 (1993) 『中国古代印刷史』印刷工業出版社。
- 馬德 (1996) 『敦煌莫高窟史研究』甘肅教育出版社。
- Macouin, F. (1984) A Propos de Carecteres d'Imprimerie Ouigours. *Revue Française d'Histoire du Livre*. Bordeaux Cedex.
- 森安孝夫 (1985) ウイグル語文献 山口瑞鳳 (編) 『敦煌胡語文獻』(『講座敦煌』6) 大東出版社, 1-98.
- Pelliot, P. (1908) Musée Guimet, manuscrit Pelliot 353 (7), 23 mai 1908.
- 錢存訓 (1990) 『紙和印刷』李約瑟主編『中国科学技術史』第5卷「科学及相關技術」第1分冊 科学出版社・上海古籍出版社。
- 米新江 (1996) 『婦義軍史研究—唐宋時代敦煌歴史考索』上海古籍出版社。
- Sander, L. (1994) Der Stifter Dhanyasena, ein ungewöhnlicher Blockdruck aus dem Museum für Indische Kunst, Berlin. In: Röhrborn, K. & W. Veenker (eds) *Memoriae munesculum, Gedenkband für Annemarie v. Gabain* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 39). Harrassowitz Verlag, Weisbaden.
- 史金波 (1993) 『西夏仏教史略』台湾商務印書館。
- 史金波・雅森吾守爾 (1997) 西夏和回鶻对活字印刷的重要貢獻『光明日報』1997. 8. 5. - 5.
- Tsien Tsuen-Hsuin (1985) Paper and Printing. In: Needham, J. (ed) *Science and Civilisation in China*, 5-1. Cambridge University Press, Cambridge.
- Warnke, I. (1981) Ein uigurisches Kolophon aus der Berliner Turfan-Sammlung. In: Röhrborn, K. & H. W. Brands (eds) *Saholia—Beiträge zur Turkologie und Zentralasienkunde, Annemarie von Gabain zum 80. Geburtstag am 4. Juli 1981 dargebracht von Kollegen, Freunden und Schülern* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 14). Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- 雅森吾守爾 (1998) 敦煌出土回鶻文活字及其在活字印刷術西伝中的意義『出版史研究』3。
- 張秀民 (1989) 『中国印刷史』上海人民出版社。
- Zieme, P. (1975) Zur buddhistischen Stabreimdichtung der alten Uiguren. *ActOH* 29 (2).
- Zieme, P. (1995 / 96) Donor and Colophon of an Uighr Blockprint. *Silk Road Art and Archaeology* 4, Kamakura.

Zieme, P. (1996) *Altun Yaruq Sudur. Vorworte und das erste Buch* (Berliner Turfantexte XVIII). Brepols, Turnhou.

Zirme, P.・百濟康義（1985）『ウイグル語の觀無量壽經』永田文昌堂.

（著者：中国社会科学院民族研究所）

（訳者：京都大学人文科学研究所）